

【研究ノート】

スポーツイベントにおけるボランティア活動参加への
重要度に関する研究

新 出 昌 明* 山 田 秀 樹* 石 井 十 郎**

A Research about an importance to participation of volunteer activities
in a sport event

Masaaki SHINDE Hideki YAMADA Juro ISHII

Abstract

The purpose of this study found the importance to participate in volunteer activities. It was investigated targeted for the volunteer of Eighth Asian winter games. Ninety - nine was collected for data. Four factors of mental reward, the value and the condition, spirit of service and personal-criticism were found as a result of the factor analysis.

When a mean according to the age by concluding of a factor was compared, the significant difference was judged by 3 factors except for spirit of service. Other means lower than age division were indicated more than 60 years old in all mental reward and 3 factors of the value and the condition and self-criticism as a result of the multi-range official approval.

I. はじめに

2017年（平成29年）2月19日～26日に札幌市・帯広市において第8回冬季アジア大会（2017／札幌）が開催された。最終のメダルランキングでは、1位が日本（金27、銀21、銅26）、2位は大韓民国（金16、銀18、銅16）、3位に中華人民共和国（金12、銀14、銅9）となった。女子スピードスケートの小平奈緒選手・高木美帆選手などの活躍が光り、過去最多のメダルを獲得した大会であった。大会の運営を手伝うボランティアは「スマイル・サポーターズ」と呼ばれ、延べ約4600人配置されたとされている。^{注1)}

今日、スポーツ競技大会の運営には不可欠ともされるボランティアの活動^{注2)}において、「2017冬季アジア札幌大会」のボランティアは、その活動を行うに当たって何を重要として活動を行うのか。いわゆる、ボランティアの「活動動機」あるいは「活動参加への重要度」を明らかに

* 国際文化学部地域創造学科

** 経営学部経営学科

することは、今後のスポーツイベント（スポーツ競技大会）におけるボランティアの募集・研修・配置・役割（ボランティアに託す仕事の内容）等、ボランティアとボランティアを活用しようとする組織とのさまざまな接点において、ボランティアの満足度を高める意味でボランティアのマネジメントに重要な結果を残すことができるものと考ええる。

過去において、ボランティアの活動動機に関しては、さまざまな研究の成果を見ることができる。^{注3)} その中でも、桜井（2002）の研究においては、ボランティア活動に参加する人々の参加動機をレビューして、各論文における「ボランティア動機概念次元」の比較を行った後に、複数動機アプローチによって参加動機構造を分析している。

スポーツの分野におけるボランティアの動機を調査した研究に目を移すと、非営利スポーツ組織のボランティアの動機を探った松岡・小笠原（2002）や総合型地域スポーツクラブのボランティアの役割と活動動機を探った新出（2010）の研究を見ることができるものの、桜井が指摘するようにボランティアの参加動機構造が体系的に捉えられているとはいえない状態にある。さらに付け加えると、「スポーツイベントにおけるボランティア活動参加への重要度」を明らかにした研究は見当たらない状況にある。

ところで筆者らの研究には、スポーツイベントのボランティア活動に参加したことのあるボランティア経験者の数が少なく、活動参加者の経験も浅い時代。それは当然のごとく、スポーツ分野におけるボランティア（活動）の歴史が浅く、研究の蓄積が少ない時代であり、いわば「スポーツボランティアの萌芽期」という時代にボランティア活動がどのようにイメージされているのかについて探った研究がある。

この研究は、長野オリンピックにおけるボランティア 2000名を対象に7次元24項目の調査項目を用いて測定し、因子分析の結果、【心的報酬】・【生活価値】・【心的条件】・【行動条件】・【社会貢献】・【自己批判】の6因子が抽出され、性別・年齢別による特徴を見いだした研究である。（新出ら、1998）

スポーツのボランティア活動が「支えるスポーツ」としてスポーツ振興の一部を形成し、実際にスポーツイベントのボランティア活動への参加も多く見られるようになって、スポーツイベントにおけるボランティアの存在が多くの人に認識されてきた今日、言葉を換えれば「スポーツボランティアの成熟期」にある今日、「スポーツボランティアの萌芽期」には「イメージ」としてしか捉えることのできなかった抽象的なボランティアの像は、ボランティア活動の経験やその参加への情報が多くなったがために、ボランティアの像がより現実的に具体化され、活動に参加するための重要度として捉えられているものと考えられる。

こうした考えから本研究は、「2017冬季アジア札幌大会」におけるボランティアを対象としてスポーツボランティアの萌芽期に「ボランティア活動のイメージ」として測定された研究（以下、「イメージ研究」とする。）と同様の調査項目を用いて、ボランティア活動参加への重要度を捉えるとともにボランティアが持つ条件としてのデモグラフィック要因との関係を探ることによってスポーツイベントにおけるボランティア活動参加への重要度とその特徴を見いだそうとすることにした。

Ⅱ. 研究の方法

1. 調査の対象と方法

本学（新出ゼミ所属）学生が「地域創造インターンシップB」という授業科目として本大会のボランティアを勤めるとのことから、卒業研究の一環として事前から作成した調査票を5人の学生に各40部持たせた。そして、大会期間中に被調査者（学生）と同活動場所で活動するボランティアに調査協力をお願いをし、了承がとれ、回答に重複のないボランティア（対象者）に対し調査票を配布、その場で回答を求め回収した。このようにして収集された調査票は、99票であった。

サンプルの特性は表1. に示したとおりである。

2. 調査票の構成と分析方法

1998年に開催された「長野オリンピック」の際に調査された調査票を基に、できるだけ同じ項目を用いることに努めながらも、大会内容の違いから一部質問項目を変更するとともに選択肢を「そう思う」から「重要である」に変更して24項目を設定し調査を実施した。

具体的には、『『冬季アジア札幌大会』のボランティア活動を行うに当たって、以下の項目がどの程度重要ですか。』という設問に対して、「とても重要である」を5、「やや重要である」を4、「どちらともいえない」を3、「あまり重要でない」を2、「まったく重要でない」を1とした5段階尺度を設定した。

データの分析には、5段階の尺度で評定された24の重要度項目に対し、間隔尺度を構成するものと仮定して、「とても重要である」に5点、「やや重要である」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまり重要でない」に2点、「まったく重要でない」に1点をそれぞれ与え得点化した。（各項目の平均値を表2. に示した。）

そして、ボランティア活動参加への重要度項目を精選するために、因子分析を施した。固有値1.0以上の因子に対し、プロマックス斜行回転（主因子法・Promax回転）を行い、因子を抽出した。

各因子の解釈を行った後、各因子のくくりで素点の平均値を算出し、各因子による重要度の実態を把握した。さらに、各因子のくくりでデモグラフィック要因（社会的属性）との関係を探り、重要度の特徴を見いだそうとした。

表1. 調査対象者の属性

項 目	度数	%
[性別]		
男性	74	74.7
女性	25	25.3
[年齢]		
10～19歳	4	4
20～24歳	44	44.4
25～29歳	19	19.2
30～39歳	9	9.1
40～49歳	9	9.1
50～59歳	5	5.1
60～69歳	7	7.1
70～79歳	1	1
無回答	1	1
[職業]		
自営業	2	2
会社員	30	30.3
公務員	5	5.1
主婦	10	10.1
学生	43	43.4
アルバイト・パート	2	2
無職（定年退職後）	4	4
その他（専門職）	3	3
[スポーツボランティア活動経験]		
経験ある	24	24.2
経験ない	75	75.8
[スポーツ以外のボランティア活動経験]		
経験ある	21	21.2
経験ない	78	78.8

(N=99)

Ⅲ. 結果及び考察

1. ボランティア活動参加への重要度の構成要素

ボランティア活動参加への重要度を構成する因子を抽出するために因子分析（主因法）プロマックス斜行回転を施して重要度項目の精選を行った。

因子分析の結果、固有値1.0以上、累積寄与率60%を越えるという基準のもとに6因子が抽出され、因子負荷量の小さい「1-5. 喜びをわかち合うもの」と「4-3. 自発的なもの」の2項目を削除して、再度、因子分析を行った。因子構造の安定と説明力のある因子を見いだすために因子の数を減らして計算を行った結果、意味のある4つの因子を抽出した。

第1因子に高い因子負荷量を示した項目は、「1-2. 充実感が得られるもの」・「1-1. 達成感が得られるもの」・「1-6. 視野が広がるもの」・「1-4. 感動が得られるもの」・「5-2. 感謝されるもの」・「1-3. 満足感が得られるもの」の6項目であり、イメージ研究の際の【心的報酬】とほぼ一致しており、イメージ研究同様に【心的報酬】とした。

第2因子は、「1-7. 自分のため（学習）になるもの」・「3-4. 継続的なもの」・「2-1. 有意義な余暇の過ごし方になるもの」・「2-2. 人生の生きがいになるもの」・「3-2. 責任が必要なもの」・「2-3. チャレンジ精神を活かせるもの」・「2-4. 自分が楽しむことのできるもの」・「3-1. 根気強さが必要なもの」と続いており、イメージ研究の際の【生活価値】と【心的条件】が複合されて構成された因子と考えられ、【価値と条件】とした。

第3因子は、「4-2. 裏で支えるもの」・「3-3. 体力が必要なもの」・「4-1. 無報酬で行うもの」・「5-1. 社会のためになるもの」・「5-3. 困っている人を助けるもの」で構成されており【行動条件】と【社会貢献】が複合された因子と考えられ、【奉仕の精神】とした。

第4因子は、「6-1. 自己満足のために行うもの」・「6-2. 偽善的なもの」・「5-4. 社会を変えていくもの」の3項目で構成されており、イメージ研究の【自己批判】と同じ因子と考え、【自己批判】とした。

以上のように、本研究において「イメージ研究」と同じような因子構造が見られたことにつ

表2. 冬季アジア大会(札幌大会) ボランティアの重要度の平均値

	平均値	標準偏差
1-1. 達成感が得られるもの	4.24	0.822
1-2. 充実感が得られるもの	4.22	0.777
1-3. 満足感が得られるもの	4.20	0.820
1-4. 感動が得られるもの	4.09	0.893
1-5. 喜びをわかち合うもの	4.12	0.732
1-6. 視野が広がるもの	4.27	0.843
1-7. 自分のため（学習）になるもの	4.19	0.965
2-1. 有意義な余暇の過ごし方になるもの	4.06	0.913
2-2. 人生の生きがいになるもの	3.97	0.839
2-3. チャレンジ精神を活かせるもの	3.93	0.824
2-4. 自分が楽しむことのできるもの	3.94	0.977
3-1. 根気強さが必要なもの	4.02	0.654
3-2. 責任が必要なもの	4.19	0.765
3-3. 体力が必要なもの	3.90	0.875
3-4. 継続的なもの	3.76	0.858
4-1. 無報酬で行うもの	4.13	0.778
4-2. 裏で支えるもの	4.25	0.812
4-3. 自発的なもの	3.95	0.885
5-1. 社会のためになるもの	4.52	0.578
5-2. 感謝されるもの	3.55	1.062
5-3. 困っている人を助けるもの	4.17	0.760
5-4. 社会を変えていくもの	3.84	0.842
6-1. 自己満足のために行うもの	3.36	1.005
6-2. 偽善的なもの	2.93	0.982

(N=99)

表3. 冬季アジア大会（札幌大会）ボランティア活動の重要度の因子分析結果

	F 1	F 2	F 3	F 4	α
【心的報酬】					
1－2．充実感が得られるもの	0.906				0.907
1－1．達成感が得られるもの	0.896				
1－6．視野が広がるもの	0.749				
1－4．感動が得られるもの	0.707				
5－2．感謝されるもの	0.631				
1－3．満足感が得られるもの	0.607				
【価値と条件】					
1－7．自分のため（学習）になるもの		0.747			0.812
3－4．継続的なもの		0.637			
2－1．有意義な余暇の過ごし方になるもの		0.546			
2－2．人生の生きがいになるもの		0.524			
3－2．責任が必要なもの		0.523			
2－3．チャレンジ精神を活かせるもの		0.475			
2－4．自分が楽しむことのできるもの		0.467			
3－1．根気強さが必要なもの		0.448			
【奉仕の精神】					
4－2．裏で支えるもの			0.802		0.759
3－3．体力が必要なもの			0.634		
4－1．無報酬で行うもの			0.632		
5－1．社会のためになるもの			0.483		
5－3．困っている人を助けるもの			0.472		
【自己批判】					
6－1．自己満足のために行うもの				0.719	0.656
6－2．偽善的なもの				0.651	
5－4．社会を変えていくもの				0.534	
固有値	7.637	2.553	1.958	1.855	
寄与率	31.82	10.638	8.160	7.730	
累積寄与率	31.82	42.458	50.618	58.348	

(N=99)

いて、今回の調査対象者に20歳代の若者が多かったことやスポーツボランティア活動の経験のない人が3分の1を占めていたことなど「イメージ研究」の際の調査対象者とやや似かよったプロフィールをもっていたことが影響しているものと思われる。

続いて、4つの因子がどのような実態をもっているかを捉えるために、因子分析で導き出された4つの各因子毎に素点の平均値を算出して比較することにした。4つの因子を構成するそれぞれの重要度項目の素点の平均値を示したものが表4. である。

22の重要度項目は、「とても重要である」に5点、「やや重要である」に4点、「どちらともいえない」に3点、「あまり重要でない」に2点、「まったく重要でない」に1点を与えて得点化したため因子別平均値も3.00を基準として、平均値が大きいと重要度が高く、平均値が小さいと重要度が低い因子と考えられる。さらに、平均値の大小は重要度の高さ・低さをも表して

いると考えられる。

4つの因子の中で、最も平均値の高い因子は【奉仕の精神】の4.19であった。次に高い平均値を示しているのは【心的報酬】の4.11、次いで【価値と条件】の4.01であり、一番平均値の低い因子は【自己批判】の3.37であった。以上のように因子毎の4つの平均値はすべて3.00を上回っており、重要度の高低はあるものの、すべての因子において肯定的な結果を示していた。

表4. 冬季アジア大会（札幌大会）ボランティアの重要度因子の平均値

	度数	平均値	標準偏差
【心的報酬】	98	4.11	0.709
【価値と条件】	99	4.01	0.556
【奉仕の精神】	98	4.19	0.542
【自己批判】	99	3.37	0.717

2. ボランティア活動の価値観（活動信条）因子に対する属性比較

まず、4つの因子に対して社会的属性による違いを見いだすために、4つの因子の括りで性別・年齢別の平均値比較を行うことにした。

まず、性別による平均値を算出して比較を行った結果を示したものが表5. である。4つの因子の性別による平均値の差に有意差のある因子は見られなかった。

続いて、年齢を30歳未満、30歳から60歳、60歳以上の3つの区分を作り、年代別による平均値の比較を試みた。（表6.）

4つの因子の年代別による平均値の差の検定（一元配置分散分析）では、【奉仕の精神】を除く3つの因子で有意差が見られた。多重範囲検定の結果【心的報酬】、【価値と条件】、【自己批判】の3因子すべてにおいて60歳以上は他の年齢区分よりも低い平均値を示していた。これらの結果は、ボランティア活動に対する高齢者層（60歳以上）と若年層（30歳未満）・壮年層（30歳から60歳）の捉え方の相違を表しているものと考えられる。

このように高齢者層と若年層・壮年層に違いが見られたことについて、若年層・壮年層においては自分が参加する活動から何でも吸収したいという貪欲さを表しているのに対して、高齢者層は社会経験の豊富さからか無欲さが窺われる姿勢でボランティア活動に参加しようとしているものと考えられるが、それらを実証するには追加的情報が必要である。

表5. 性別による冬季アジア大会（札幌大会）ボランティアの重要度因子の平均値

	男性	女性	t 値	有意確率
【心的報酬】	4.15	4.00	9.29	n.s.
【価値と条件】	3.97	4.11	-1.07	n.s.
【奉仕の精神】	4.21	4.13	0.65	n.s.
【自己批判】	3.37	3.36	0.11	n.s.

表6. 年齢別による冬季アジア大会（札幌大会）ボランティアの重要度因子の平均値

	30歳未満	30歳～60歳	60歳以上	F 値	有意確率	多重範囲検定
【心的報酬】	4.32	3.78	3.22	14.871	***	60歳以上<30歳～60歳, 30歳未満
【価値と条件】	4.11	3.92	3.40	6.776	**	60歳以上<30歳～60歳, 30歳未満
【奉仕の精神】	4.29	4.00	3.97	3.302	n.s.	
【自己批判】	3.43	3.50	2.62	5.488	**	60歳以上<30歳未満, 30歳～60歳

(*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001, n.s.=No Significant)

しかしながら、スポーツイベントにおいてボランティアを活用しようとする組織は、年代層によってボランティア活動参加への重要性が異なっていることを踏まえながらボランティアの募集・研修・役割・配置を実施していく必要がある。

IV. まとめ

本研究は、スポーツイベントにおけるボランティア活動参加への重要度とその特徴を見いだそうとすることであった。そこで、冬季アジア大会（札幌大会）のボランティアを対象に「ボランティア活動参加への重要度」を調査した。

その結果、【心的報酬】・【価値と条件】・【奉仕の精神】・【自己批判】の4因子が抽出された。各因子の括りで素点の平均値を比較したところ、年代別による平均値比較では【心的報酬】・【価値と条件】・【自己批判】の3因子において高齢者層（60歳以上）が若年層（30歳未満）・壮年層（30歳から60歳）よりも低い平均値を示していた。

今後のスポーツイベントにおいてボランティアを活用しようとする組織は、年代層によってボランティア活動参加への重要性が異なっていることを踏まえながらボランティアの募集・研修・役割・配置を実施していく必要がある。

注

1. 毎日新聞のニュース・情報サイト
<https://mainichi.jp/articles/20170223/ddl/k01/050/183000c> 2018年9月30日閲覧
2. 北川薫・内野悌司・大成浄志・小西美智子・斎藤加代子・櫻井忠義・藤澤邦彦・藤本繁夫・本田靖・磨井祥夫・葛西順一・坂本康博・西村次郎・村岡功（2018）高等学校改訂版保健体育. 第一学習社, p.172
3. 詳細は拙稿（2005）を参考にされたい。

付記

本研究は、新出ゼミ（4 BWA学生）の学生が卒業研究に使用したデータを用いて分析を試みたものである。データ収集に当たった5名の学生に感謝の意を表したい。

参考文献

- 松岡宏高・小笠原悦子（2002）非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機. 体育の科学, Vol.52, No4, 277-284.
- 桜井政成（2007）ボランティアマネジメント：自発的行為の組織化戦略. ミネルヴァ書房：京都.
- 桜井政成（2002）複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析：京都市域のボランティアを対象とした調査より. The Nonprofit Review, Vol.2, No2, 111-122.
- 新出昌明・斎藤隆志・川崎登志喜（1998）長野オリンピックにおけるボランティアのイメージ分析：スポーツ経営学的視点から. 東海大学紀要体育学部 第28号：21-30.
- 新出昌明（2005）首都東京を中心とした市民マラソンにおけるボランティアの実態. スポーツボラン

ティア学研究 第1巻第1号：3-18.

新出昌明（2010） 総合型地域スポーツクラブにおけるボランティアの役割と実態. 体育経営管理論集
2：45-53.